

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 4年次生 木村 遥華

1. はじめに

2018年8月18日から27日までの10日間、国際交流基金の助成を受け、バンクーバーサマープログラムに参加いたしました。Vancouver International College (VIC)へ語学留学し、カナダでの授業やホームステイを通して得られた貴重な経験を、ここに報告させていただきます。

2. スケジュール

平日は午前中に専門的な医療英語を学び、午後はカナダで実際に働いている医療関係の方々の話を聞き、施設見学を行うなどをしました。放課後や土日は観光してまわりました。

3. 医療英語

「VICでは英語以外使ってはいけない」というルールがあったので、日本語を全く使わずに英語だけで授業を受けました。初めての経験だったので、単語を聞き取るのに必死で戸惑いもしましたが、先生も優しく、わからないまま進んでいくこともなかったため、だんだんと英語に慣れていき、5日目にはある程度聞き取れるようになり、返事もすぐに出来るようになりました。内容については、例えば「痛い」という表現ひとつをとっても、どれほど痛いのかの程度を表すような細かい表現を学び、それから患者がどれほど辛いのか、緊急性はどれほどのものか、どのようなことが原因になっているのかなどを英語で話し合い、答えを出していくといった内容でした。普段大学で行なっている文法や英単語などの知識をつけるだけでなく、実際にアウトプットをして現場で使えるような実践的な内容で、国際化が進む現代において、英語が改めて大切なコミュニケーションツールであることを実感しました。



授業風景

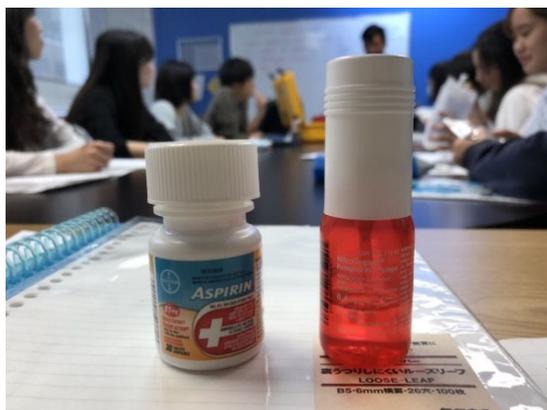
4. ゲストスピーカー

救急隊員の方の話では、研修期間によってどこまで治療に関わることができるかが決まっていることや、日本と比べて救急車の数が圧倒的に少ないことに驚きました。実際に用いる道具や薬

などを見せてもらい、普段あまり学ぶことのない救急のことについて関心を持つきっかけとなりました。

医師とは、まず会った瞬間にラフな印象を受けました。日本で「医者」といえば白衣を着て、堅いイメージがあるけれども、カナダではそのようないかにも「医者」といった服装をしておらず、普段着のような格好で病院にいるようでした。患者の立場に立った時、見た目も堅くなく、ラフに接してくれた方が自分の症状を伝えやすくなるだろうと感じ、日本と比べて良いところだと思いました。カナダでは初めから大きな病院には行かず、地域の診療所に行き、そこでは対処できないと判断された時に招待状を書いてもらい、大きな病院に行くという制度を取っていました。また、病院の夜勤時に薬剤師はおらず、テクニシャンが調剤業務を行うという話を聞き、日本ではありえないことなので驚きを感じました。

カナダで働く日本人医療通訳の方の話では、患者から聞いた症状をそのまま医師に伝えるだけの単純なもののように思いましたが、患者の家族などにも配慮しながら、正確な内容を医師に伝えなければならず、ある程度医療に対しての知識が必要な大変な仕事だと思いました。



救急に用いる薬剤等

5. 施設見学

病院では、実際に薬剤部の様子を見学させていただきました。カナダでは日本と違い、薬剤師が調剤業務を行うのではなく、テクニシャンが調剤業務を行なっていることは大学の授業で聞いたことがありましたが、薬剤師とテクニシャンの割合が1対2と薬剤師の2倍の人数のテクニシャンがいることを知り、テクニシャンがいない日本の薬剤師の仕事との違いで最も驚いた部分でした。薬剤師の仕事は医師のカルテを確認し、実際に患者に渡し、説明することが主な内容でした。この仕組みであれば、薬剤師は調剤業務に時間を取られずに、専門的な薬の内容について考える時間が増えるので、日本よりも効率的であると思いました。日本では電子カルテが使用されていますが、カナダでは医師の直筆のカルテを読み解く作業が行われており、その面では日本の方が効率的であると感じました。

アシスタントを教育する学校も見学しました。ここは日本でいう専門学校のようなものでした。アシスタントはテクニシャンを支える人たちのことで、そのアシスタントを育成するための授業を行なっていました。内容としては今、私達が実習で行なっているような調剤業務に関するものでした。ここではカナダで薬剤師として働いている韓国人の方の話をうかがいました。韓国と日

本の医療は似ているようですが、カナダとは全く異なっているので、どこに違いがあるかと質問されても多すぎて言い切れないと仰っていたのが印象的でした。

薬物やアルコール依存症になってしまった方々を更生する施設への訪問が、私の中で一番印象的なものでした。まずその施設へ行くためにバスに乗ったのですが、窓から見える景色が日本とは全く違ったものでした。ダウンタウンにもホームレスがところどころいるなどは思っていたのですが、「一人歩き注意」とあらかじめ言われていたその地域を通った時ににおいが変わり、どう表現すればいいかわからないような、様子が異常な人がたくさんいました。施設に着いた後は実際にそのような人をどのように更生させていくかを聞きました。そこはキリスト教の施設なので、寄付で食事などをまかなっているとのことでした。入室する際には面接があり、更生する意思があるかどうかを確認するそうです。日本では見られない、カナダだからこその施設だったのでとても新鮮でした。



アシスタント育成施設にて

6. ホームステイ

私のホームステイ先は少し独特でした。ホストファミリーは退職されたご夫婦だったのですが、最後まで旦那さんに会うことはできませんでした。奥さんはフレンドリーで、私の質問にも優しく答えてはくれるのですが、あまり家におらず、ホストファミリーとの交流は少しだけでした。その代わりたくさんの留学生が同じホームステイ先において、その人達と交流ができました。韓国人、台湾人、メキシコ人、パナマ人、あと日本の高校生もいました。それぞれ母国語が違うので、コミュニケーションを取る手段は英語しかなく、それぞれの国の訛りをもった英語だったので、なかなか聞き取れず、何度も謝ってしまいましたが、それでも話しかけてきてくれて、冗談を言ったり、どんな勉強を普段しているのかについて話してみたりしました。もし私がもっと英語がうまく話せたら、この人たちともいろんな話ができて、自分の知っている世界を大きくすることが出来ただろうなととても感じ、英語の大切さを改めて感じるものとなりました。

7. 観光

時間が許す限り、たくさんの観光地へ行きました。日中の時間が日本と比べて長いので、いろんな風景を見て回ることができました。街と自然が違和感なく共存しているような感じを受けました。ビーチではスポーツをしていたり、家族がのんびりと寝転がっていたりと、自然の中でゆったりと時間が過ぎて行くのを感じました。



Capilano suspension bridge park

8. さいごに

今回のバンクーバーサマープログラムを通して、本当に貴重な多くの体験をすることができました。英語の大切さはもちろん、自分の知っていることがどれほど限られたものであるかをひしひしと感じました。これからまた普通の大学での生活が始まりますが、これらの経験が活かせるようにものごとに取り組んで行きたいと思います。



VIC の前で撮影